忘却の果て

かつての切ない陽射しが僕をつらぬく
謎のような色彩をまとい
肌触りのない
あまりにほのかで、遥かに遠く―――
しかも濃密な切なさが満ちた陽射し

微小な痛みが全身を快く包む
その傍らを幻のように現れ、そして遠ざかる
解放を切望することを許されぬ―――声、言葉・・・
その一方では
滝のように流れ落ちる粒子が発光する未来へ
逃亡を強要する「時間」という命令者がいる

僕は、どんな近似をも拒絶する！
あらゆるものを呑み込み、仮託し、無数の分身をつくり、
我々を自己疎外へと駆り立てる、そんな近似など
この世界から消してしまいたい
彼奴こそ、愚弄に満ち満ちた麻薬で

我々を腑抜けにしている売女（ばいた）ではないか

この胸に今なお残る、かすかな痛み
絶望を包み込み、涙に溶かし去る・・・痛み
その輻射が僕をつらぬき
自己破壊の果てに我々を呑み込む様を
みじめな滅亡を哀しげに指し示す

(2004.2.6)